

〔資料〕

シングルマザーの子育てに関する国内文献レビュー

門間 晶子¹⁾²⁾ 浅野みどり³⁾ 野村 直樹⁴⁾

要 旨

現代の子育て環境には、離婚率の上昇や少子化に伴う家族形態の多様化、家族機能の変化等が生じている。本稿の目的は日本におけるひとり親家族、特にシングルマザーの育児に関する研究の動向を概観すること、およびこの問題に関する今後の看護研究の可能性について探ることである。今後の看護研究の可能性については、シングルマザーの育児の困難さに敏感になることと、彼らの育児の現実を彼ら自身の捉え方で描き出すという視点から検討したい。この取り組みは、児童虐待予防を含め、地域で生活する多様な家族に予防的あるいは危機介入的に関わる看護の役割へ有用な示唆を与えると考える。日本におけるひとり親家族に関する研究は社会学、社会福祉学、心理学、医学、女性学等の分野で行われてきた。「ひとり親」「片親」「母子家庭」等をキーワードとした文献検索によると、家族の構成に焦点を当てた研究から家族の機能に焦点を当てた研究へと変化していた。研究方法としては、従来は比較的少数の対象者についての数量的分析、フォーマット化された短時間のインタビュー、事例検討が中心であった。

今後の研究の可能性として、シングルマザーが抱える問題への、その問題同士の相互作用を含めた探求、分析者自身の規範や従来常識とされてきたことへの取り組み、会話の質的な分析、現状や問題点を当事者の視点で描き出す方法、などがあげられる。そのような研究のためには、研究者と研究参加者の協働関係やナラティブ・セラピーの基本となる「無知の姿勢」が鍵となる。

キーワード：ひとり親家族、シングルマザー、子育て、文献レビュー

動を合わせて振り返る。

1. はじめに

子どもの頃、児童文学作家松谷みよ子さんの「小さいモモちゃん」シリーズに親しんだ。1960年代生まれと思われるこのモモちゃんにアカネちゃんという妹が生まれたのだが、実はその後両親は別れ、母親がひとりで姉妹を育てていたということを、数年前の新聞記事で知った。「40年前は、子ども向けのお話に両親の不仲や離婚などタブーであった…」と当時70歳を越えた松谷さんは取材に応じて私生活と作家活

日本における離婚件数は1964年以降毎年増加し、1983年をピークにいったん減少したものの、1991年から再び増加し、2002年には過去最高を記録した¹⁾。離婚の増加はひとり親家族の増加につながり、中でも特に母子世帯が急増している。母子世帯となった時の母親の平均年齢は33.5歳、末子の平均年齢は4.8歳であり、まだ幼い子どもを抱えた30歳代の女性がシングルマザーとして出発するのが典型的な姿となっている²⁾。また、近年増加の一途をたどる児童虐待の事例を検証する中から、ひとり親での育児と児童虐待のリスクとの関連についても指摘されている³⁾⁴⁾。これらのことから、ひとり親家族、特に急増する離別母子家族は、支援者がその子育ての困難

¹⁾名古屋市立大学看護学部

²⁾名古屋大学大学院医学系研究科博士課程後期課程

³⁾名古屋大学医学部保健学科

⁴⁾名古屋市立大学大学院人間文化研究科

さを理解して必要な支援を検討する際の重要な一領域となりつつある。

そこで本稿では、ひとり親家族、特に離別母子家族に焦点を当て、その育児に関する国内の研究の動向を概観する。そして、離別母子家族の育児の現実を描き出す視点と彼らが育児において遭遇しやすい困難に敏感になる視点を併せ持ちながら、今後の看護における研究の可能性について探る。

II. 日本における離別シングルマザー

まず、日本における離別シングルマザーの状況を概観したい。厚生労働省が約5年ごとに行う「全国母子世帯等調査」によると、2003年11月現在の母子世帯数は1,225,400世帯であり、5年前に比して28.3%増加している²⁾。母子世帯になった理由として、調査開始の戦争直後は戦争未亡人が大多数を占め、その後も「死別」が高い割合であったが、年々「離婚」による理由が増加してきた。1978年度調査ではほぼ同率であった両者がその後逆転し⁵⁾、現在では母子世帯の80%が離婚による²⁾。主に戦争未亡人とその子どもへの経済支援からはじまったひとり親家族への支援施策は、1960年代に制定された児童扶養手当制度や母子福祉法（1981年に母子及び寡婦福祉法と改正）⁶⁾を柱として、離別母子家族の急増などの諸状況に対応しながら改訂を繰り返し、経済的自立や仕事と子育ての両立を支援する方向を目指してきた⁶⁾。離別母子家族が抱える経済的問題に代表される生活の諸問題については、前述したような、離別母子家族の数が死別母子家族を上回ろうとする頃から注目され始めた。それは1970年代後半の「母子研究」という雑誌の創刊⁷⁾や母子家族に焦点を当てた雑誌の特集記事⁸⁾に象徴される。しかし、経済問題や福祉施策の方向性を見守るような提言はされているものの、母子家族の育児に焦点を当て、その現実に迫ろうとする調査や研究は少ない。

「母子家庭」という呼び方は、一般的に定着しているが、「欠損家庭」「崩壊家庭」という表現もよく目に

してきた。日本においてこのような家族がどのように呼ばれてきたかについては、東京都女性問題調査研究報告「ひとり親家族に関する研究」の中で丁寧考察されている⁵⁾。諸外国においてbroken family（これが導入されて日本における「崩壊家庭」となった）と呼ぶことによって正常からの逸脱という価値判断を植え付け、これらの家族にスティグマをもたらしていたことへの反省から、1974年のイギリスの報告において、one-parent familyという用語が用いられた⁹⁾⁷⁾⁸⁾。この概念は、多様な家族の一形態として、ワンペアレントファミリーを価値判断抜きニュートラルな立場で考究しようとする意図をもち⁸⁾、こうした家族が置かれている状況や抱えている問題を明らかにするための調査研究にとって必要不可欠な概念として⁷⁾導入された。日本では1978年にワンペアレントファミリーの考え方が紹介され、それ以降、社会福祉領域においてひとり親家族や母子家族という用語を用いた研究が行われている⁷⁾⁹⁾。「単親」は同じ発音の「单身」と取り違えられるという問題もあり、1985年に東京都単親家族問題検討会が「ひとり親」の用語に統一して用いることを提案した¹⁰⁾。このように社会学の領域では、「ひとり親」家族の概念や呼称について、1970年代後半からそれなりの議論が展開されてきたが、心理学や医学の領域においてはその流れが十分浸透せず、1980年代以降の研究においても、「欠損家族」という表現が、特に断りや定義もなく用いられている場合がある^{11)~13)}。

なお、本稿においては、価値判断を排した表現としてのone-parent familyの訳語である「ひとり親家族」および同じ趣旨で「母子家族」「父子家族」、あるいは特に親に焦点を当てる場合は「シングルマザー」「シングルファーザー」という用語を用いる。統計学上の用語、あるいは引用された用語はこの限りではない。

III. ひとり親家族の育児の現実を描き出す視点

先にふれた松谷みよ子氏の児童文学を改めて読む

と、子ども向けの話だが、章によっては母親が主人公になっている。毎晩靴だけが帰ってくる「パパ」や、夜枕元に立って母親と会話する「死神」の存在によって、夫婦間の葛藤とどちらにも進めないでいる母親の気持ちがなんとも象徴的に描かれている¹⁴⁾。相談に行った先の森のおばあさんに、「動く木」(父親のこと)と「育つ木」(母親のこと)がいっしょの鉢に植えられていたら、根っこ同士が絡まりあってどちらも息ができなくて枯れてしまう、と言われ、母親は「根分けしてあげないと」と淋しくつぶやいて帰るのである¹⁴⁾。

今は、両親の離婚について子ども向けに語られた本があり、「離婚」そのものから受け取る世の人々のイメージも多少は変化してきている。シングルマザーを主人公としたテレビドラマや明るく書かれた離婚やシングルマザーの子育ての本などもそれに一役買っているであろう。落ち着いて過去を振り返って書かれた手記はまとまりがあり、いろいろ大変なことはあっても今はよいように作用している、と読み手を勇気づけてくれる。子育てに有用な情報と共に、あなたはひとりではないという心強いメッセージが送られる¹⁵⁾。

しかし、「今、ここ」のリアルな体験を言葉にしたものは、それが言葉にされることで意味を与えられ、受け取る側が自分の経験に基づいてその意味づけに参加していくという多声的で重層的な相互作用を、より多く生み出す力を持つ。その相互作用こそが、今、ここでの苦しみに意味を与え、次に起こす行動を左右する。つまりその人が他の人との関係の中で生み出す言動の何かを変えることにつながるのではない。広島市で離別父子家族の男性を中心として1984年に発足した<父子の集い>のメンバーの語りは実に迫力がある¹⁶⁾。シングルマザーとは異なる困難を抱えているらしいシングルファーザーが直面する困難、そしてその中から生み出している喜びについて、私が多少なりとも近づけたように感じたのは、共著性をもって作成されたその集いの記録に触れた時であった。

この両者、すなわちすぐれた児童文学作品と、参加者の会話をていねいに取り上げ、聞く側と語る側の協働作用や発信する際の共著性をもった書物とに共通する要素は何であろうか。丁寧な描写、ユニークな体験をその人自身の言葉で語らせる口調、共感こそすれ決して一般化して解説しない聞き手のスタンス、などであろうか。何よりも、独白ではない、聴衆を得てその場で作り上げられる会話の力、ではないだろうか。広島のパパたちは仲間たちを聴衆とし、モモちゃんのパパは「パパの靴」「死神」「森のおばあさん」あるいは「猫のプー」などの聴衆を得ている。

著者らはこのように、ひとり親家族の生活や育児の経験に迫るために、語られた会話を丁寧に扱い、その場に居合わせた人々を聴衆として協働で描き出すこと(共著性)に深い関心をもつ。ところで、これまでの日本におけるひとり親家族の研究にはどのようなものがあり、どのような方法で取り組まれてきたのであろうか。

IV. ひとり親家族に関する研究の動向

日本におけるひとり親家族に関する研究は社会学、社会福祉学、心理学、医学、女性学等の分野で行われてきた。著者らの関心はひとり親家族のうち、離別母子家族の母親の、育児を中心とした日々の生活についての経験であるが、文献を探し始めてすぐ、そのような研究は少ないことに気づいた。そこで、研究動向を概観する際には、離別母子家族を意識しながらも、ひとり親家族を扱ったものを対象とした。

まず医学・公衆衛生学・看護学の領域に関するこのテーマへの関心の動向を見るために、「ひとり親」、「片親(家庭)」、「母子家庭」、「シングルマザー」等のキーワードを用いて、医学中央雑誌(1983年~2005年)に収録されている文献を検索した。1983-1990の8年間では25件、その後5年ごとに1991-1995年21件、1996-2000年29件、2001-2005年85件と増加傾向を示し、特に2000年以降の増加がめざましい。なお、検索された文献の中には、医学特有の、遺

伝学的な用語としての「片親」(片親ダイソミーなど)および片方の親(の何らかの影響)という意味あいでの研究が含まれ、これらは今回の文献検討の目的とは異なるため除外した。このほか、心理学、社会学、女性学等の領域の文献を探し、1978年以降のひとり親家族の、特に子育てに関する研究について検討した。

まず、医学や看護学の領域についてであるが、1980年代までの精神科、神経科領域における食欲不振、登校拒否の子どもに関する研究では、いわゆる「欠損家庭」としての母子家族に注目したのがあり、父親の役割を重視する視点から、その父親がいるかないかという家族構成に焦点を当てていた^{11)~13)}。一方、同じく1980年代半ばの牧原らの登校拒否児に関する研究は、「母子家庭」「父子家庭」の概念についての考察を先行研究に基づいて丁寧に行い、登校拒否の要因として家族構成のみではなく、社会精神医学的視点を提案している⁹⁾。この頃が、社会学に比べて後れをとったものの、医学や看護学における「ひとり親家族」に新しい視点が加わる分岐点と思われて興味深い。

また、慢性疾患をもつ子どもの医学的・保健学的問題への影響という視点から、子どもの病状改善を阻む要因として母子家族を扱った報告がある¹⁷⁾¹⁸⁾。別の研究では、保護者の離婚や死亡を経験した糖尿病治療中の子どもの血糖コントロール状態は悪化したものの、両親家族とひとり親家族の間では血糖コントロールに差がなかった。これは欧米でのひとり親家族、シングルマザーの児の血糖コントロールが悪いという報告とは異なる結果が導かれたというものであった¹⁹⁾。また、母子家族における母親の多重役割負担のために生じる身体的・時間的・心理的な余裕の無さが養育態度を含む養育環境に影響し、幼児の社会生活能力を低めているとする研究もある²⁰⁾。

しかし、「母子家族であることの何がどのように子どもの健康に影響を与えるのか」について掘り下げた報告は見あたらなかった。このように、医学・看護

学の領域におけるひとり親家族に関する研究は数が少なく、その中では子どもへの影響を事例検討的に、あるいは数量的な分析によって示そうとする研究が目立つ。助産師の立場から女性の子育て経験を理解しようとした研究があるが、それも風景描画というユニークな方法を用いた事例検討のスタイルをとっている²¹⁾。

地域における家族支援の最前線にいる職種として保健師があげられ、その専門誌には虐待予防やその支援への特集が多く組まれている。しかし、ひとり親家族に焦点を当てた研究はほとんど見あたらず、20年近く前の研究を見つけた。これは、子どもの夜尿を問題行動の一つと捉え、それと母親のパーソナリティとの関係を検討するために母親の定位家族(生育家族)の構成を扱っている²²⁾。問題行動の捉え方は現在とはずいぶん異なると考えられるが、子育て支援には両親の生育家族の理解が必要であるという考え方は、現在の児童虐待への関わりに通ずるものがある。

心理学の領域においては、ひと昔前、臨床心理学の領域において、母子家族であることと子どもの非行とを関連づけた報告がなされた時期があったが、それ以降はむしろひとり親家族の子育てに関する研究は下火になり、現在に至るまで空白期間が続いている²³⁾。堀田は、シングルマザーに関する心理学系の研究を概観する中で、我が国では未だにシングルマザーはマイノリティであり、差別の観点から研究対象とすることを控える風潮があるとしている²³⁾。欧米では「父親の意味」を明らかにするための対照群としてのシングルマザー研究から、父親不在を埋め合わせる家族システムの形成に焦点を当てる研究へと移行している。堀田もまた、話の流れを研究参加者に委ねるような半構造化面接と旅行へ同行しながらの参与観察というユニークな方法を用いて、父親不在を埋め合わせる家族システムの形成を描き出している²⁴⁾。

社会学・社会福祉学においては、前述したように、多様な家族の一形態として、価値判断抜きの一-

表1. ひとり親家族に関する主な論文の取り組みの目的 (発表年順)

著者・発表年	番号	種類	取り組みの目的
吉田, 1979	8)	総説/概説	母子家庭の抱える問題の構造とそれらに対応する母子福祉施策を明らかにする。
牧原他, 1985	9)	研究	(登校拒否の家族研究において父親の不在が目されることから) 家族の問題が端的に表れやすいと考えられる単親家庭の登校拒否を研究することによって登校拒否研究に寄与する。
中村, 1986	34)	総説/概説	変容過程にある家族のうち、とりわけ経済的機能、愛情的機能、養育的機能の面で問題をもつ母子家庭に視点を合わせその生活構造を明らかにする
井上他, 1986	22)	研究	子どもの両親の定位家族体験とこどもの夜尿発生との関係について、夜尿群と対照群を比較することによって明らかにする。
鈴木, 1987	25)	総説/概説	父母のいずれかを失った家族を巡る用語「欠損家族」「片親家族」「単親家庭」「母子父子家庭」等がいつ頃からどのように使用されているか、諸文献、福祉施策、実態調査、統計等から整理することによって用語の概念形成、さらには家族概念の発展に寄与する。
樽川, 1989	26)	総説/概説	母子家庭になった当時に焦点を当て、生活状況と母親の主観的認識や心理状態を検討し、適応を規定する要因を考察する。
色川, 1997	36)	総説/概説	日本におけるワンペアレント・ファミリー、特に生別母子世帯に関する過去20年間の研究の動向を日本社会福祉学会での研究報告の趨勢から整理し、その課題を述べる。
松浦, 2000	10)	総説/概説	日本におけるひとり親家族の動向と研究成果をあとづけ、著者の関心である「ひとり親家族における子どもの社会化」に対する今後の課題を明らかにして研究の方向性を提案する。
小林, 2001	35)	総説/概説	ひとり親家庭の生活課題を把握する視点について、「支援の届きにくい」ひとり親家庭の問題の把握から支援の効果測定までの幅広い取り組みのうち、特に生活課題把握の視点の立て方に焦点化してその特徴を明らかにする。
堀田, 2002	23)	総説/概説	母子世帯やシングルマザーを巡る研究を概観する。
近藤, 2002	32)	研究	インタビュー調査をもとに、NPOによる母子家庭への就労支援の有効性を検討する、およびシングルマザーに対するスティグマの生成メカニズムとエンパワメントの可能性について検討する。
高他, 2002	20)	研究	母子家庭がその母親の養育態度に与える影響、母親の養育態度を含む養育環境が幼児の社会生活能力に与える影響、一般家庭における父親や母親の養育態度と幼児の社会生活能力との関係を明らかにする。
堀田, 2003	24)	研究	母子家庭の子育てをテーマとし、半構造化面接と参与的親子観察等の質的な研究方法を用いて、母子家庭の中で父親不在を埋める家族システムがどのように形成されているかに焦点を当てて検討する。
新保, 2003	33)	総説/概説	厚生労働省『母子世帯等実態調査』からの世帯調査(H10年版)を用いてひとり親家族のプロセスと特徴の現状と支援課題を整理する。
宮本他, 2005	19)	研究	保護者の離婚または死亡が小児・思春期年齢の1型糖尿病(T1DM)の血糖コントロールに与える短期的な影響について検討する。
湯澤, 2005	29)	総説/概説	日本におけるひとり親世帯へのワークフェア型政策の動向を所得保障政策の流れをふまえて整理した上で、生活実態の指標から政策の妥当性を検討し、今後の課題を明らかにする。

*単行書、調査報告書は除く。

*番号は、本稿末尾の引用文献番号を示す。

parent family (ひとり親家族) という概念⁷⁾が英国から導入され、その支援について議論されてきた。特に社会福祉学に関しては、社会福祉の一分野としての母子福祉が成立していることにより、社会学以上にひとり親家族の問題、特に母子家族の問題が、従来から概論や講座などの中で比較的きちんと取り上げられてきた⁵⁾。したがって、ひとり親家族の概念の整理²⁵⁾、離別か死別かによる家族の適応を規定する要因の違いの検討²⁶⁾なども行われてきた。母子家族と父子家族が抱える生活上の困難がかなり異なる様相を呈することについては、性別役割分業をとることで家族が経済的にも育児・家事遂行にも有利な状況を築きやすいという日本の文化的、社会政策的状況に起因するという意見²⁷⁾²⁸⁾がある。また、高就労率を示しながらも貧しいという日本の母子家族の問題を

政策の変遷等から批判的に考察する視点も示されている²⁹⁾。研究の方法としては、アンケートのような従来からの方法をとっているものの、「当事者の視座から」その結果を検討するという姿勢を意識的にしている研究がある³⁰⁾。東京都女性財団による研究は、ひとり親家族の声を拾い上げる他に、ひとり親家族を見る世間の人々の意識調査と専門家への聞き取り等を実施し、ひとり親家族研究の課題を明確にしている⁵⁾。

さらに、シングルマザーの経験を扱う研究には、女性学・フェミニズムの領域からのアプローチがある。これは女性に関することを、女性の手によって、女性の利益のために、女性の状況を変えるために行う調査であり、調査方法に共通することとして、研究者と対象者は対等な関係である、調査対象者自身が

調査に参加し、ともに問題を考察すること、研究者は自分の個人的経験を考察に用いること、があげられる²⁷⁾。

このほか、当事者組織やひとり親家族を支援するNPOが行う調査研究も見出される³¹⁾³²⁾。

レビューした研究のうち、書籍や報告書は除き、ひとり親家族の現状や先行研究を概観したもの、あるいはひとり親家族の子育てやその影響について研究し、新しい視点を提案するという点から代表的であると見なした論文について、その取り組みの目的を表1にまとめた。

V. ひとり親家族の子育ての困難さに敏感になる視点

ひとり親家族の増加を少子化の要因の一つと見ることもできるが、少子化対策として離婚率を減らそうという発想にはならないだろう。それよりも元気に育つ子どもの数とひとり親家族との間には気になる関係がある。報道でふれる児童虐待事件に、ひとり親のもとでの、あるいはそこに新しいパートナーが加わっての子育ての最中に生じた悲劇を見るのは著者らだけではないと思う。

厚生労働省が児童虐待防止法施行から2003年6月末までに虐待死亡事例として把握した125件(127人死亡)について検証したところ、虐待者としては実母が77人と半数以上を占めていた³⁾。また、児童虐待が起りやすい、養育支援が必要となりやすい要素のうち、養育環境(親側の要因)に関するものとしては、多い順に、「ひとり親家庭(未婚含む)」33、「内縁関係の家庭」29、「転居」27、「地域からの孤立」25、「子連れ再婚家庭」16が挙げられた³⁾。その後児童虐待防止法が改正され、虐待防止ネットワークの整備や地域関係機関・住民への啓発が諮られたにもかかわらず、依然として児童虐待による死亡事例は後を絶たない。最悪の結果に至る前に予防の手だてはなかったのかを検証するために、厚生労働省は専門委員会を設置し、先の調査期間に続く平成

2003年7月から12月までの児童虐待による死亡事例24件(25人死亡)を調査した。ここでも、養育支援が必要となりやすい要素として「地域からの孤立」と「ひとり親家庭・未婚」が24件中それぞれ13件、12件を占めて上位であった⁴⁾。

特に離別母子家族が地域から孤立しやすいことは、約30年前の、日本における母子家族研究の発祥の頃から指摘されている⁸⁾。例えば当時は離別母子家族が親族関係から孤立しやすいという調査報告がある⁸⁾。現在では、親世代と同居する母子家族が増加しており²⁾、離婚した娘に対して以前に比べると親や世間が寛容になっている風潮が窺える。しかし離別母子家族は、現在でも父子家族や死別の母子家族に比べると持ち家率が低く、家族数が少なく²⁾、孤立しやすい要因を抱えていると考えられる。また経済的問題を抱えやすいことから、ひとり二役をこなす忙しく濃密な生活時間が社会活動への参加を鈍らせ、社会的連帯の輪からはずれやすいという指摘⁸⁾は現在にも当てはまる。つまり、先の2つの調査で示された児童虐待事例がもつ養育環境、親側の要因は、そのほとんどがひとり親家族、特に離別母子家族に生じやすい問題ともとらえることができる。勿論、親がひとりかふたりかということそのものではなく、夫婦や家族の関係の安定性が虐待を引き起こすような不安定な養育環境に関係していることが理解されている。しかしなお、ひとり親家族の育児が抱えやすい困難を楽観視することはできない。

ひとり親家族の育児が抱えやすい困難については、すでに述べた厚生労働省の調査等から、母子家族では「家計面」、父子家族では「家事」が悩みの第一にあげられている²⁾が、このような調査からは「何がどのように」困っているのかについては見えてこない。単純に考えても、子育てという多くの人にとって未知で予測不能な営みを、家族が食べていけるだけの収入を確保しながらひとりの親で担うというのは大変なことである。多胎児をもつ家族の育児を巡る困難や育児支援の必要性は広く理解されるようになり、支援のあり方の研究も多くなされている。ふたり

の親に同時に複数の子どもが生まれて育てることが大変であるのに似て、ひとりの親にひとりないしはそれ以上の子ども、というひとり親家族の子育てもまた大変であることは想像に難くない。

しかし、一方で多胎児の子育てをハイリスク要因と見なすことはあっても、ひとり親の子育てを、ひとり親というそれだけの理由でハイリスクとみなすことは、支援者にとっても本人にとっても抵抗感を抱くことであろう。実際、差別感が伴うという意識から、ひとり親家族への研究がなかなか着手されてこなかった経緯がある¹⁰⁾²³⁾。しかし、ひとり親家族の支援にかかわる専門家へ聞き取りを行った調査では、「専門家の、ひとり親家族は両親家族とあまり違いはないという見方が、ひとり親家族に対してより好意的だとは言いきれない。」としている⁵⁾。母子寮職員や心理相談員など、厳しい貧困や子どもの虐待等深刻な状況への関わりが濃密である職種ほど現実を厳しく捉え、反対に教師など深く関わりきれていない職種ほど、漠然とした感覚的な捉え方をする⁵⁾。

また、ひとり親家族の子育てを注意深く見守ろうとするこれらの専門家は「問題が決してひとり親家族であることだけに由来するのではないことを知っており」「不穏な関係が日常化している両親家族よりも平穏なひとり親家族の方が、子どもにとっては安定的な環境であることを指摘」してもいる⁵⁾。ひとり親家族、特に離別母子家族の子育てについて何かを断定できる人は誰もいないが、そのような家族が抱えやすい子育ての困難や危うさを認識することは、ひとり親家族を弱い存在と見なすことと同じではなく、必要な支援を考える上で重要な視点であると考えられる。

VI. 今後の研究の可能性と意義

ひとり親家族、特に離別母子家族は、育児において共通した、あるいは独特の孤立感や閉塞感を抱えていることが予測されるが、これまでに述べてきたように、その経験に迫るような研究はまだ数が少ない。

我が国では未だにシングルマザーはマイノリティであり研究対象となりにくく、また母子家族を一括して研究対象とすることに関して、研究者が差別的に感じて研究を控えたとも考えられている²³⁾。また、研究の焦点が子どもの発達や成長、慢性疾患のコントロールなど、子どもに当たっていることが多く、子育てを担う家族、特に女性・母親の体験に焦点を当てた研究は少ない。シングルマザーの子育ての経験に関する研究はまだ手がつけられていない。

ひとり親、特にシングルマザーへの支援課題としては、従来から、就労や社会保障などの経済的支援、教育・訓練への支援、子育て支援等が指摘されてきた⁸⁾³²⁾³³⁾。さらに近年では、情報・ネットワークの必要性、シングルマザーになることを自己決定することへの支援、差別・スティグマの払拭への支援の必要性が新たに指摘されている⁵⁾¹⁰⁾³⁴⁾³⁵⁾。ところが、シングルマザーを対象としたこれまでの研究で用いられてきた比較的少数の対象者についての数量的データの紹介やフォーマット化された短時間のインタビューでは、このような課題に取り組むには限界がある。

そこで、新たな研究のスタンスや方法として、次のような提案がなされている。経済的貧困に限らず、シングルマザーが抱える一つ一つの論点を深く研究し、それらの相互作用を見定める研究、家族のありように対する分析者自身の規範をも十分に検討した上での分析、従来常識とされてきた言説を放置せず分析対象とする、オープンエンディッドなインタビューによる質的な分析、現状や問題点を当事者自身の言葉で描き出すという叙述方法、面接を数回重ねる相互作用の中で深い洞察を得る、家族の行動を参与観察してそれについて話し合い、互いの理解が深まり新しい気づきを生む等の方法²⁾⁷⁾²⁰⁾である。また利用者の生活に近い視点での研究が求められており、そのためには当事者の生活にどれだけ接近できるかが鍵である³⁴⁾としている。

すなわち、研究参加者(対象者)と研究者との相互作用や協働を基盤にして、体験や問題を当事者の視

点から描き出すような質的記述的な研究が望まれている。先に述べた広島市での父子家族の集いで父親たちが語る喜びや苦しみに同伴した研究者は、それらが父子家族に関する統計的事実や先行研究の結果とあまりにも違っていたと述べている¹⁶⁾。ここでの支援者や研究者のスタンスは、夫婦関係を自明のものとし、「離別」はそれに適応できない個人の逸脱としてみる視覚を背後仮説としてもつアプローチ¹⁶⁾とは正反対のものであった。正反対のアプローチとは、シングルファーザーたちをシングルの子育てにおける専門家と見なして、調査者が彼らから教えてもらうという、ナラティブ・セラピーの基盤となる「無知の姿勢」^{36)~38)}であったと考える。それはつまり、調査者がこれまでの経験、事実、知識をもとにして理解、説明、解釈を作り上げないというスタンスであり、そのようなスタンスで彼らと対話を成立させることによって、協働で物語を紡ぎ出す。

ひとり親家族の生活実態に関心を持ち、最も近いところで援助に携わっている専門家は世の中の人々が抱いている一面的な解釈や偏見の誤りを論破する重要なコメントを提供する可能性がある⁵⁾ことを、これまでの研究が主張している。研究者と対象者という枠を超えて子育てにまつわる日々の現実の語りをしていねいに扱う研究が、ひとり親家族の理解や支援につながると考える。

〔 受付 '06.1.6 〕
〔 採用 '06.11.14 〕

文 献

- 1) 厚生統計協会：厚生指標臨時増刊 国民衛生の動向, 52 (9) : 61, 2005
- 2) 厚生労働省雇用均等・児童家庭局：全国母子世帯等調査結果報告, 2005年1月
- 3) 厚生労働省雇用均等・児童家庭局：児童虐待死亡事例の検証と今後の虐待防止対策について, 2004
- 4) 厚生労働省雇用均等・児童家庭局：児童虐待による死亡事例の検証結果等について、「児童虐待等要保護事例の検証に関する専門委員会」第1次報告, 2005年4月
- 5) 庄司洋子, 大日向雅美, 渡辺秀樹他：東京都女性問題調査研究報告 ひとり親家族に関する研究, 東京女性財団,

1993

- 6) 厚生統計協会：厚生指標臨時増刊 国民福祉の動向, 52 (12) : 92—99, 2005
- 7) 京極高宣：イギリスにおけるワンペアレントファミリーの研究と動向, —“one-parent family (ひとり親家族)”と“broken family (欠損家族)”との概念的相違にふれつつ—, 母子研究, 1 : 41—54, 1978
- 8) 吉田恭爾：概説 母子家庭の問題と母子福祉施策, 現代のエスプリ, 142 : 5—20, 1979
- 9) 牧原寛之・長屋正男・中嶋真知子：単親家庭の登校拒否に関する研究—7年間の児童相談所記録に基づく分析—, 児童精神医学とその近接領域, 26 (5) : 303—315, 1985
- 10) 松浦 勲：日本における「ひとり親家族と子ども」研究の動向と課題, 九州工業大学研究報告, 人文・社会科学, 48 : 83—93, 2000
- 11) 福田正樹・六川俊一・宇津木利雄, 他：矯正施設(女子少年院)収容者の性行動と意識・態度(その2), 思春期学, 4 (1) : 73—78, 1986
- 12) 蓼原学宗・赤松えり子・久保木富房, 他：神経性食欲不振症に家族療法を適用した1例—母子家庭の場合—, 心身医療, 3 (11) : 85—87, 1991
- 13) 星野仁彦・新国 茂・金子元久, 他：登校拒否症の発症に關与する家族・社会的要因, 福島医学雑誌, 35 (4) : 413—423, 1985
- 14) 松谷みよ子：モモちゃんとアカネちゃん, 講談社青い鳥文庫, 1980
- 15) しんぐるまざあず・ふぉーらむ編著：シングルマザーに乾杯! 離婚・非婚を子どもとともに, 現代書館, 2004
- 16) 春日キスヨ：父子家庭を生きる 男と親の間, 勁草書房, 1989
- 17) 亀田 誠・岡田正幸・村山史秀, 他：施設入所療法を要した気管支喘息児における心理的変化と予後についての検討—描画テストを利用して—, 呼吸器心身医学, 11 : 145—149, 1994
- 18) 出口大輔・安原大輔・胸元孝夫：小児発症1型糖尿病症例—家族の問題と医療のあり方—, 心身医学, 42 (4) : 252—257, 2002
- 19) 宮本茂樹・染谷知宏・中村伸枝, 他：保護者の離婚, 死亡が血糖コントロールに与える影響およびひとり親家庭糖尿病児の血糖コントロール状態について, 小児科臨床, 58 (3) : 339—341, 2005
- 20) 高 健・郷間英世・秋葉繁晴, 他：母子家庭における幼児の社会生活能力と母親の養育態度—一般家庭との比較を通しての検討—, 小児保健研究, 61 (1) : 73—81, 2002
- 21) 山下早苗・城下利香・尾崎八代, 他：子育て中の健康な女性が描いた風景構成画の質的研究, 香川母子衛生学会誌, 3 (1) : 51—61, 2003
- 22) 井上龍子・佐瀬美恵子・根来千穂, 他：保健婦援助の専門性と固有性をめぐる研究 夜尿研究を素材にして IV. 夜尿児にみる両親の定位家族体験の研究, 保健婦雑誌, 42 (12) : 56—61, 1986
- 23) 堀田香織：第6章シングルマザー (稲垣佳世子・岩田純一・近藤邦夫他編集, 児童心理学の進歩・2002年版), 41, 136—158, 金子書房
- 24) 堀田香織：シングルマザーの心理と子育て—半構造化面

- 接によるアプローチ, 児童心理, 57(1):117-123, 2003
- 25) 鈴木敏子: 「母子家庭」および「父子家庭」をめぐる概念の種類と変遷, 高知大学教育学部研究報告, 第2部, 39: 31-51, 1987
- 26) 樽川典子: ワンペアレント・ファミリーの適応—離別・死別母子家庭のばあい—, 社会学ジャーナル, 14: 142-157, 1989
- 27) 中田照子・杉本貴代栄・森田明美: 日米のシングルマザーたち—生活と福祉のフェミニスト調査報告—, ミネルヴァ書房, 1997
- 28) 永田 祐: 母親か労働者か? 福祉国家におけるひとり親家庭の国際比較と日本の位置, 愛知淑徳大学論集, 文化創造学部篇, 4: 11-23, 2004
- 29) 湯澤直美: ひとり親世帯の生活問題と所得保障, 社会福祉研究, 90: 52-62, 2005
- 30) 湯澤直美: 母子家族等多様な形態における子育て支援のあり方調査研究報告書(平成14年度児童環境づくり等総合調査研究事業報告書), 財団法人こども未来財団, 2003
- 31) 赤石千衣子: シングルマザーの現状と課題, 女性労働研究, 44: 65-68, 2003
- 32) 近藤理恵: シングルマザーのスティグマとエンパワメント—NPOによる就労支援と文化的不平等の日米比較—, 社会分析, 30: 131-144, 2002
- 33) 新保幸男: ひとり親家庭の生活現状と課題, 月刊福祉, AUGUST, 12-15, 2003
- 34) 中村利昌: 低所得者の生活構造—とくに母子家庭を中心として—, 日本大学人文科学研究所研究紀要, 32: 49-70, 1986
- 35) 小林 理: ひとり親家庭の生活課題への視点: 課題を把握する視点を対象として, 日本の地域福祉, 15: 51-62, 2001
- 36) 色川卓男: 日本におけるワンペアレント・ファミリー研究の現状と課題—生別母子世帯を中心に—, 季刊家計経済研究, 33: 41-49, 1997
- 37) 野村直樹: 無知のアプローチとは何か, (小森康永, 野口裕二, 野村直樹編著), ナラティブ・セラピーの世界, 167-186, 日本評論社, 1999
- 38) Sheila McNamee & Kenneth J. Gergen: Therapy as Social Construction (シーラ・マクナミー・ケネス・J・ガーゲン編, ナラティブ・セラピー, 野口裕二・野村直樹訳, 59-85, 金剛出版, 1997)
- 39) Harlene Anderson: Conversation, Language, and Possibilities: A postmodern approach to therapy (ハーレーン・アンダーソン, 会話・言語・そして可能性, 野村直樹・青木義子・吉川悟訳, 109-135, 金剛出版, 2001)

A literature review on child-rearing by single mothers in Japan

Akiko Kadoma¹⁾²⁾, Midori Asano³⁾, Naoki Nomura⁴⁾

¹⁾Nagoya City University, School of Nursing

²⁾Nagoya University, Graduate School of Medicine

³⁾Nagoya University, School of Health Sciences

⁴⁾Nagoya City University, Graduate School of Humanities Social Sciences

Key words: one-parent family, single mother, child care, literature review

With the increase of divorce rate and the decrease of birth rate, the Japanese society now face various modes of family styles and its functions. The purposes of this paper are to: (1) provide an overview of studies ever done within Japan on one-parent family, especially single-mother family, and its child care; and (2) explore the possibility of a new kind of research on this subject. For the second purpose, we need not only to be sympathetic to the child care environments of single-mother families but to adopt a suited method to describe reality from their points of view. Such an endeavor in terms of research might be helpful for nurses whenever they work for prevention and intervention into the family crises including child abuse.

One-parent families have been the topic of study in different fields, such as sociology, social welfare, psychology, medicine, and women's study. We searched relevant literature through such key words as "one-parent family," "lone-parent," and "single mother," and we have found out that the focus of the studies has been shifted from family structure to family functions. The methods employed in these studies included quantitative analysis on a small population, formatted brief interview, and case study.

We think that the following considerations may be necessary for future studies in this subject. We need to: (a) investigate the meaning of various problematic factors that would make the life of one-parent families difficult, as well as the relationships between those factors; (b) specify the norms and preconceptions taken for granted by the researcher; (c) conduct qualitative analyses of conversation; and (d) describe the family reality from the insider's point of view. Creating such a collaborative research environments with the family, we can perhaps utilize the method developed in narrative therapy—a Not-knowing approach to the people about whom we study.